

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：74331
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2017～2021
 課題番号：17K02245
 研究課題名（和文）日本におけるクィア神学の文脈化をめぐる研究 「解放の神学」アプローチの可能性
 研究課題名（英文）A study on the contextualisation of queer theology in Japan: the potential of the 'liberation theology' approach.
 研究代表者
 堀江 有里（HORIE, Yuri）
 公益財団法人世界人権問題研究センター・その他部局等・専任研究員
 研究者番号：60535756
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：クィア神学の日本における文脈化を目的とした本研究では主に2点を明らかにした。
 1）都市「貧困」地域でのフィールドワークや離島・非都市部の教会・関連組織での調査を行い、家族主義や性規範の表出の共通・相違点を考察した。とくに非-人口過密地域では規範は存在するが「家族」的な組織運営の可能性が低い点が明らかとなった。
 2）天皇制や五輪大会をめぐる運動への参与観察を行い、キリスト者の関わりと論点を考察した。1980～90年代には天皇代替わりをめぐる憲法における「政教分離」原則の観点からキリスト者の全国的な抵抗運動があったが、この間に衰退がみられた。この現象については理論・実証研究が必要さが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 性規範を問う学問的営為である「クィア神学」は、日本において、2010年代より研究は進んでいるものの、そのほとんどが英語圏の理論の紹介にとどまっている。そのなかでは「クィア神学」がエイズ・アクティヴィズムと深くかわり、実践的な社会運動の場において性的マイノリティの視座から生み出された営為であることも忘却されつつある。
 本研究では、経済的・政治的・文化的格差の問題を人びとの生活の座から問う作業を行ってきた「解放の神学」の実践と理論のアプローチを採用することにより、すでに積み重ねられてきたキリスト教社会運動の出来事を「クィア神学」の日本における文脈化の可能性として遂行してきた点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：Aiming to contextualisation of queer theology in Japan, this study identified 2 main points.
 1) Fieldwork in urban 'poor' areas and research in churches and related organisations in remote islands and non-urban areas examined common and different manifestations of "familism" and gender/sexual norms. In particular, it was found that in underpopulated areas, norms exist but the potential for 'family' organisational management is in lower level.
 2) Participatory observation of the movement over the Emperor System and the Olympic Games, considering the involvement of Christians and the issues involved. In the 1980s and 1990s, there were nationwide resistance movements of Christians over the replacement of the Emperor from the perspective of separation of church and state, but after this period there was a decline in the movement. It became clear that theoretical and empirical research is needed on this phenomenon.

研究分野：社会学、クィア神学

キーワード：クィア神学 キリスト教 性的マイノリティ 地域格差 社会運動 天皇制 オリンピック

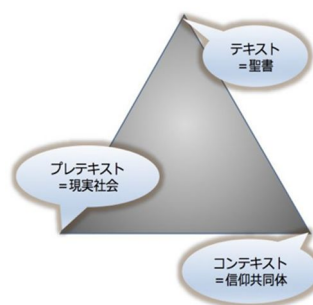
1. 研究開始当初の背景

昨今、日本でも性的マイノリティの存在が可視化され、その実態が明らかにされつつある。2015年より東京都渋谷区などで同性パートナーシップ証明書が発行されるなど行政サポートも進みつつある。他方で同性パートナーシップをめぐる議論に対し、「伝統的家族が崩壊する」などの反対論も顕在化するようになった。そのような反対論ではキリスト教などの言説が援用される事例がみられるが、非キリスト教文化圏の日本では性的マイノリティを研究対象とする学問領域や当事者たちの運動において、宗教的な言説を一般社会とは切り離し、軽視する傾向にある。この傾向は、宗教に問題を仮託・責任転嫁することによる思考停止を生み出す危険性もある。また、このような宗教的な言説の切り離しや軽視は、同時に、性的マイノリティによるノをめぐる宗教集団内やその周辺での諸活動や言説を孤立化させる問題もたずさえている。そこから性的マイノリティをめぐる実態を検討する際、宗教のもつ文化への影響力を読み解くひとつの方法として「クィア神学」をめぐる議論を提示する必要があるが、本研究の喫緊の課題であった。

2. 研究の目的

本研究では、「クィア神学」を対象とし、「解放の神学」の手法をアプローチ方法として採用した。本研究の目的は、英語圏で積み重ねられてきた「クィア神学」についての議論を理論的に検討したうえでどのように日本の文脈に位置づけることができるのかを考察することであった。とくに課題として、社会運動の営為を理論化する「クィア神学」の出発点を踏まえる必要があった。そのため、日本においても各地で繰り広げられているさまざまな地域のネットワークを読み取ることで、理論的な研究とキリスト教にかかわる社会運動や教会の日常活動という実践とをどのように架橋できるかを考察する必要がある。

「解放の神学」のアプローチとして採用されてきた プレテクスト(現実世界)-テキスト(聖書)-コンテクスト(信仰共同体)のモデルを本研究でも基盤に置いた[図参照]。いまだ日本の「クィア神学」ではこのようなモデルをもとにした研究はほとんどない。そのため、理論 実践 を横断するプラットフォームのひとつをクィア神学の分野で提示し、広く宗教研究や社会学などの研究領域に還元することも本研究の目的であった。



3. 研究の方法

本研究では、(1)「クィア神学」にかかわる英語圏での先行研究を検討する理論的研究と、(2) 参与観察やフィールドワークに基づく実証的研究をおこなった。

(1)理論的研究については、研究会等を通して重要文献の精読および異なる分野における文献・研究のポジションナリティ間の関連を考察した。また、(2)実証的研究については、都市「下層」地域やキリスト者が含まれる社会運動・市民運動への参与観察、関連組織や会議への参加により、個別あるいはネットワークの相互行為を考察した。

具体的には、研究会に参加しての議論のほか、公開研究会や講演、論文やエッセイなどの執筆などで研究の中間報告を重ね、コメントや批判を得たうえで研究活動を継続した。

4. 研究成果

(1)「クィア神学」と社会をめぐる理論的研究

英語圏でのクィア神学の理論的研究

キリスト教では、とくに北米でのゲイ解放運動が進んでいった1970年代以降、同性愛者を排除する言説も同様に広がることとなった。その対抗手段として、マジョリティ集団への包摂を求める議論の積み重ねが進められてきた。しかしながら、そこには限界が生じる。というのも、包摂を求める議論ではそもそも排除する側の規範を問うことがないがしろにされるからである。そこから包摂に主眼を置く(護教論的な)神学への批判的な見解をもつ議論に注目をした。そのひとりであるリン・トンスタッド(組織神学)『クィア神学』(Linn Marie Tonstad, 2018, *Queer Theology: Beyond Apologetics*, Cascade Books)の邦訳をおこなった。神学研究者たちとの共訳で2022年度内に新教出版社より刊行される予定である。

「クィア神学」の日本への文脈化の理論的研究

「クィア神学」という言葉を提起したロバート・ゴスは1990年代に米国ニューヨークでのクィア・アクティヴィズムにかかわるなかで理論を生み出してきた(Robert Goss, 1993, *Jesus Acted Up: A Gay and Lesbian Manifesto*, Harper San Francisco)。その考察対象となったのは、差別・排除を再生産・維持する国家であり、それに迎合・同化する教会である。この手法を踏襲し、本研究では日本における国家体制と社会構造、そして教会との関係という文脈のなかで諸課題を検討することとした。

とくにプロテスタント教会史をみると、日本の近代国家形成と教会の宣教活動が広がる時期

が重なっている。「明治」期の宣教師たちがもたらした「家族」規範は、それ自体がたんなる「輸入」ではなく、大日本帝国が軍国主義を構築するにあたり、近代天皇制を社会制度として利用してきたことと相互関係にもある。歴史を読み直すことでこのような国家と教会の「家族」規範、そこから再生産・維持される性規範の背景にある相互関係が明らかとなった。これまでこのテーマにおいて性差別的観点から研究されたものは少なくはなかったが、本研究の成果は、「家族」主義が異性愛主義を伴い、性的マイノリティへの排除を生み出す土壌をつくってきたことを明らかにした点である。

(2) クィア神学の文脈化にかかわる実証的研究

地域社会とキリスト教運動

2017～2019年度には、大都市圏における「貧困」地域（いわゆる都市下層地域）におけるキリスト教運動の参与観察を実施した。具体的には横浜寿町のキリスト者たちがかかわる運動に参加し、そこから派生的に地域活動に従事した（日本基督教団神奈川教区寿地区センター、日本基督教団なか伝道所、寿炊き出しの会、寿越冬闘争、寿アルク理事会、ことぶき学童保育など）。かつて日雇労働者が簡易宿泊所に多く生活する地域であった寿町は、現在も他地区からの移動者も含め、単身男性人口が圧倒的多数を占める。ただ、アルコール依存症の人びとが「寿町にたどり着いた」と表現するように、さまざまな状況をもつ人びとが流入してくるところに特徴をもつ。なかには他地区では「自分らしく」生活ができなかったというトランス女性などの性的マイノリティも存在し、自らの性自認や性表現を明らかにして日常生活を送っている。地域共同体や居場所づくりが重視される地域において、マジョリティの性規範が排除を生み出すのみならず、葛藤がありつつも性的マイノリティの共存可能性がみてとれた。この点は性的マイノリティをテーマとしたシングル・イシューの研究ではみいだせない成果である。

また、人間関係とともに性規範が希薄になりがちな都市部よりも、過疎地の方が性的マイノリティの日常生活が困難であると指摘されてきた。同時にキリスト教会が異性愛主義的な「家族」規範を想定し、流布させてきたことで性的マイノリティの置かれた困難も指摘されてきた。過疎地へのフィールド調査や情報収集によって得た知見では、地域共同体の紐帯が強ければ強いほど、規範は働くものの現実の人間存在を否定あるいは断罪する様子はみられなかった。とくに教会においては規範として維持しようとしても教会構成員を「家族」と称するような現実が伴わない。その点から、キリスト教の「家族」主義は地域によって異なる点が明らかになった。

2020年以降、コロナ禍という予期せぬ出来事のなかで現地を訪問することが困難となった。オンラインで聞き取りなども一部可能ではあるが、実際には高齢者など環境が整えられない人びととのコミュニケーションは困難である。何よりも、地域活動の置かれた状況の変化（商店の閉鎖や流通の停滞による物資不足、さらにはそれらに影響を受けた人びとの日常生活や精神的状況）を読み取ることは直接的に現地を訪問しないと把握できないことである。この点を本研究活動の途上で強く認識した。

横浜寿町以外で本研究の調査（地域社会とキリスト教）へのおもな協力団体等は以下のとおりである。

日本基督教団奄美地区教師会、日本基督教団瀬戸内教会、同かな保育園（九州教区奄美地区）、徳之島教会（奄美教区奄美地区）、名瀬教会（九州教区奄美地区）、周防教会（西中国教区山口東分区）、宜野湾伝道所（沖縄教区）など。

課題間の連携とキリスト教運動

上記の日本プロテスタント史における国家との関係は過去の問題であるだけでなく、現代にも大きな影響を及ぼしつづけている。2019年には天皇代替わりが実施された。前回の代替わりの時点では、皇室神道によって実施される諸儀式が「政教分離」原則に反するとの大阪地裁判決も出され、各地での反対運動が起こり、さらには全国的なネットワークの形成や記録集の公刊などがおこなわれた。キリスト教関連での教派を超えたネットワークの動きはなかったものの、前回の方式をほぼ踏襲して実施される代替わりに、首都圏では市民運動として期間限定の抗議行動のネットワーク団体にもキリスト教団体や個人の参加がみられた（おわってんねっと／終わりにしよう天皇制！「代替り」に反対するネットワーク）。また、時期的につづいて実施された東京五輪をめぐる社会運動にも多くの人びとが重なって参加した（おことわりリンク／「オリンピック災害」おことわり連絡会）。これらの運動で参与観察を実施した。

天皇代替わりと五輪というふたつのイベントのなかで共通するのは、国家における天皇制という中心への抗いがたさと、国家行事におけるナショナリズムの発動である。これらは学問においても社会運動にも再三指摘されてきたことであるが、今回の参与観察をとおして明らかになったのは、これらの国家行事がそれぞれ性差別や異性愛主義という規範を伴って遂行されてきたことである。とくに運動の担い手としての女性たちの参加も多く、集会や路上アピールなどでは性的マイノリティたちの現場からの声もしばしば聞かれた。この点は、前回の天皇代替わりの時期と大きく異なり、社会運動や諸議論の構成メンバーが変化してきていることを示している。フェミニズムをテーマとした雑誌にも天皇代替わりや東京五輪に関する特集が組まれるケースもあり、本研究の成果の一部も寄稿している（アジア女性資料センター『f-visions』第4号、2021年）。

上記以外の本研究の調査(課題間の連携とキリスト教)へのおもな協力団体等は以下のとおり。
日本基督教団神奈川教区社会委員会ヤスクニ・天皇制問題小委員会、反天かながわ、「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会、ヤスクニ問題読書会(西湘南)、女性と天皇制研究会、日本基督教団京都教区性差別問題特設委員会、同「教会と社会」特設委員会、同滋賀教区社会委員会、日本基督教団九州教区セクシュアル・ハラスメント対策特設委員会、日本基督教団性差別問題連絡会(有志団体)など。

なお、実証的研究()についても、すでに論文やエッセイなどを執筆したほか、講演や公開研究会でその成果を報告し、今後の課題についての示唆を得ている。

ほかに本研究が継続的に連携したプロジェクトとしては、富坂キリスト教センター、アフターミング・ミニストリー・プロジェクトなど、キリスト教の教派を超えたグループがあり、それぞれ研究発表や論文執筆をおこなっている。

(3) 国際的ネットワーキング

韓国におけるフェミニスト神学研究ネットワークとの連携

韓国では2000年代以降、キリスト教のなかで性的マイノリティに対する攻撃が激化している。「差別禁止法」に家族形態や性のあり方についての多様性を含む案が出されて以降、その抵抗勢力としてキリスト教保守団体が反対運動を繰り広げている。そのようななか、フェミニスト神学における性的マイノリティの課題を断片的ではあるが、継続して議論する機会がもたれている。

1988年1月に超教派の女性たちが集まり、「在日・日・韓 女性神学フォーラム」が開始された。第20回(2011年)にはその歴史を閉じたが、再開準備会(2015年)を経て、済州島で再開第1回(通算21回)を開催、以降、大阪生野(2018年)、韓国坡州(2019年)、沖縄(2020年)と継続している。本研究では、日本側での実施時に実行委員会に参加し、企画・運営に従事した。

このフォーラムに従事するなか、以下のことが明らかとなった。「キリスト教と家族制度」を主題とした第8回(1997年)では女性神学における異性愛主義についての問題が初めて俎上に載せられ、プログラム外でも活発な議論が重ねられるに至った。つぎに「現場からレイシズムを考える」を主題とした第12回(2003年)では、沖縄の現場から「日本」とは何を意味するのか、深く問われた。とりわけ、現状の日本政府による沖縄への米軍基地の過重強要や、教会のあり方をみると、引き続き、議論すべき重要な課題であることが確認された。このような確認から、女たちは一枚岩ではなく、格差も考えていくべきであるという課題が明らかとなった。

北米におけるフェミニスト神学研究ネットワークとの連携

北米のアジア女性たちの研究者ネットワークである「PANAATM(Pacific, Asian, and North American Asian Women in Theology and Ministry)」(アジア太平洋・北米アジア女性の神学と宣教のためのネットワーク)から招請を受け、「Panel on Sharing Asian/North American LGBTIQ+ Network: A Conversation」(アジア・北米のLGBTIQ+ネットワークをめぐるパネルセッション:対話)に登壇し、日本の教会と性的マイノリティの置かれている状況、クィア神学の課題について報告をおこなった。(2021年3月27日(土)日本時間/オンライン開催)

モデレーターはDr. Su Yon Pak(米国ユニオン神学校教授)であり、Kristine Chong(韓国/LGBTにかかわるカフェ活動)、Elizabeth Leung(台湾/米国合同教会牧師)、Pearl Wong(香港/クィア神学アカデミー)とともに登壇し、とくに東北アジアにおける性的マイノリティの課題について議論した。そこで明らかになったことは、これまでもフェミニスト神学で議論が蓄積されてきたことと同様、家父長制や家意識のあり方が、キリスト教のなかでも再生産・維持されている現状である。性差別と性的マイノリティに対する差別が共通している点を多く持つこと、東北アジアでの継続したネットワークの構築の必要性が

(4) 今後の展望

上記した研究活動については中間報告を各地からの招請を受け、講演や公開研究会において実施した(国内は群馬、東京、神奈川、京都、大阪、兵庫、広島、山口、福岡。海外は韓国、米国)。2022年9月には研究期間全体の成果を踏まえて市民への還元を行う(日本聖公会北海道教区)。このような報告段階において、学問研究と社会運動の架橋可能性を探ると同時に地域やキリスト教の教派を超えたネットワークを再構築することができた。今後も継続してその広がり、なかで研究活動を実施したい。

また、本研究プロジェクトの研究活動を継続していた時期(2017~2021年度)にもクィア神学にかかわる重要な著作が刊行されている(工藤万里江『クィア神学の挑戦』新教出版社、2022年;小林昭博『同性愛と新約聖書』風塵社、2021年)。また、月刊誌『福音と世界』(新教出版社)では「クィア神学とはなにか」(2018年7月号)、「クィア神学は何をするのか」(2021年12月号)をテーマとした特集も組まれている。このようなキリスト教/神学領域での広がりがありながらも、しかし、それらの知見を(1)日本という国家体制・法・社会構造のなかでどのように読解していくのか、(2)他領域でのジェンダー/セクシュアリティ研究あるいはクィア研究のなかでどのように位置づけるのかという点については、いまだ議論は広がっていない。本研究で得た知見をもとに、クィア神学の日本における文脈化の作業をさらに掘り下げていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 5
2. 論文標題 ポストフェミニズム状況における連帯可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 76(12)
2. 論文標題 日本社会でキア神学する、ということ 国家・家族・市場、そして教会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 4
2. 論文標題 「メディアの祭典」に利用される「LGBT」 東京五輪、そしてこれから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 f-visions	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 97
2. 論文標題 路上に出現する 共同性 天皇代替わりの運動経験をふりかえって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ディファレンシャル	6. 最初と最後の頁 8-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 30
2. 論文標題 「オリンピックはどこにもいらない！」 ダイバーシティ戦略批判と反五輪運動からの考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人権教育研究	6. 最初と最後の頁 129-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 6
2. 論文標題 「関係」を規定するのは誰か？ 反婚 の視点から家族政策を問う	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア・ジェンダー文化研究	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 15
2. 論文標題 天皇制とキリスト教への一考察 身分差別・性差別・異性愛主義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 キリスト教文化	6. 最初と最後の頁 55-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 74 (6)
2. 論文標題 聖別 という差別温存装置 キリスト教のもつ他者理解の不可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 93(2)
2. 論文標題 キリスト教における『家族主義』 クィア神学からの批判的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 163-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 28
2. 論文標題 「国家と教会」論・再考 天皇代替わり時代におけるキリスト教会の責任	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人権教育研究	6. 最初と最後の頁 49-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 73(7)
2. 論文標題 教会をめぐるクィアな可能性 怒り の回復とその共同性に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 74(4)
2. 論文標題 朝鮮半島の平和統一と女性の役割 ー第3回(通算23回)在日・日本・韓国 女性神学フォーラム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 34-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 72(8)
2. 論文標題 「家族教会観」批判にむけての試論 天皇制・家族主義・教会	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀江有里	4. 巻 30
2. 論文標題 反婚 をめぐって 「レズビアン」という視点からの試論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教会と女性	6. 最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 21件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 堀江有里
2. 発表標題 罪の赦し と権力構造
3. 学会等名 第168回聖書を読み直す会（日本基督教団京都教区性差別問題特設委員会）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀江有里
2. 発表標題 「関係」を規定するのは誰か 反婚 の視点から家族政策を問う
3. 学会等名 国際シンポジウム「パートナーシップと家族の形をめぐって」（奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuri HORIE
2. 発表標題 Introducing Christian LGBTIQ+ networks in Japan
3. 学会等名 PANAAWTM (Pacific, Asian, and North American Asian Women in Theology and Ministry) online seminar: Introducing Asian / North American LGBTIQ+ networks (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀江有里
2. 発表標題 天皇代替わりにキリスト者としてどのように向き合うのか
3. 学会等名 日本基督教団関東教区群馬地区2019年度平和集会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀江有里
2. 発表標題 “他者によりそう”とは何か 「信仰」が孕むハラスメントの温存装置を考える
3. 学会等名 第18回 日本基督教団九州教区セクシュアル・ハラスメント公開研修会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀江有里
2. 発表標題 可視性・承認・主流化 日本におけるLGBTの状況
3. 学会等名 国連大学グローバル・セミナー 第34回湘南セッション (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀江有里
2. 発表標題 異性愛主義と性別二元論が生み出す差別 排除の主体は誰なのか
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 中道基夫編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 キリスト新聞社	5. 総ページ数 234
3. 書名 ペンテコステからの旅路：聖霊降臨日から教会行事暦へ	

1. 著者名 堀内哲編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同時代社	5. 総ページ数 348
3. 書名 令和から共和へ：天皇制不要論	

1. 著者名 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 クィア・スタディーズをひらく2：結婚、家族、労働	

1. 著者名 新教出版社編集部編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 216
3. 書名 統べるもの／叛くもの：統治とキリスト教の異同をめぐって	

1. 著者名 新教出版社編集部	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 326
3. 書名 宗教改革と現代	

1. 著者名 菊池夏野・堀江有里・飯野由里子編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 クエア・スタディーズをひらく1：アイデンティティ、コミュニティ、スペース	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------